

大学祭をふりかえって

第十四回大学祭は、新D棟落成の祝いをこめて、去る十月二十三から四日間、盛大に繰り広げられた。年々歳々行われる大学祭は、その形は同じであっても、内容は深められている。この意味から私は、本年度の大学祭の成果を心から喜ぶものである。

さて、統一テーマは『Challenge Now ——目醒めよう内なる自分に——』というものであった。ソクラテスの入汝自身を知れVにも似たこのテーマは、学長先生が感心され、テーマ講演者の佐保田先生にもお誉めを頂いたのだが、しかし、このテーマがいま突然に出現したのではない。それは先輩達によって築かれた伝統の中からおのずから生れてきたものなのである。

大学祭のテーマの歴史を繙いてみると、昭和四十二年に行われた第一回大学祭では、女子短大の存在意義を模索して「短大は花嫁学校か」と反発し、第二回では「女子短大生の可能性」を探り、第三回と第四回では、女性として真に「生きる」道を追求している。ときには「飛躍」(51・53年)を試み「若者の主張」(46年)もしているが、ふと「自らの中に危機」(47年)を感じ「心のふれあい」(49年)こそ大切だと悟り「てをとりにあつて」(52年)和を説いたこともあった。『Challenge Now ——目醒めよう内なる自分に——』の統一テーマは、このような背景の中から誕生したのである。

ところでテーマの精神は、展示の随所に見い出すことができた。例えば国文学会の発表は、十六夜日記・御伽草子・歎異抄を通して中世人が主体性に目醒め行動した姿を見事に表現していたし、幼児教育科の絵本展や玩具

展、家政科の被服展や行事食展、美術科の作品展は、これすべて実習を通して自己を見つめ表現しようとしたものばかりであった。また、書道部ではテーマの精神の外に、新D棟の落成を祝う作品の展示が燦として光り輝いていた。

一般に、大学祭は本来の意義を失いかけているといわれている。一時期を画した「政治色の濃い大学祭」が姿を消してから、ここ数年間は「仲よく楽しく遊ぶ大学祭」が主流をなしている。人はこの傾向を「軽さの時代」の反映と見る向もあるが、わが比治山女子短大にあっては、見ごたえがあり重さを感じる研究の発表や展示がやや後退して、軽やかな音楽の中で食品バザーを楽しむという傾向が見えはじめてきた。果してこのままでよいのであろうか。

いまや私共は、△大学祭とは何か▽と問う原点に立ちかえらなければならない時が来たと考える。元来、大学祭は、教職員と学友会とが一体となって展開される△神聖なる教育行事▽なのである。そして音楽やゲームやバザーは、その教育行事を支え彩どりとして加えられているにしかすぎないものと思うからである。

奇しくも本年の大学祭の統一テーマは、私共に内なる自分を見つめさせ深く内省させてくれたが、同時に大学祭をも見つめ考えさせてくれる結果となった。私は、この立派な統一テーマを掲げその実をあげて来た学友会並びに大学祭実行委員その他関係諸姉に敬意を表わすと共に、来る第十五回の記念大学祭が、その本来の姿に立ちかえって展開されるよう祈るものである。

比治山女子短大新聞（昭・55・12・17）